

報告書

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター主催

フィールドネット・ラウンジ企画

国際ワークショップ

調査地との新たな関係を探る：現代モンゴル研究を事例として New Perspectives on the Relationship with Study Areas based on Modern Mongolian Studies

開催日時 2014年2月22日（土）13:00-18:10

開催場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306 MM セミナー室

本企画は、(1) 東西冷戦体制が崩壊した 1990 年代以降のモンゴル諸地域を事例として、調査者と被調査者という関係性を超えて研究者が調査地とどのような関係を構築することができるのか（あるいはすでに構築されているのか）を、文系・理系の多様な分野のモンゴル研究者の経験をもとに検討すること、(2) モンゴル地域研究情報を共有化していくための方策について議論をおこなうことを目的に開催された。



This workshop was held in order to examine new perspectives on relationships between researchers and the people of study areas based on Mongolian studies after the collapse of the Cold War regime in the early 1990s, and to discuss how to create a platform for sharing research and facilitating communication.

Session I 調査 | Field Survey

●柿沼薫（東京大学）

「放牧地の植物を調べる：遊牧民との共同研究」

KAKINUMA Kaoru (The University of Tokyo)

Vegetation Surveys in Rangeland: Collaborative Researches with Local Pastoralists

発表者はこれまで草原の土地荒廃の程度を検証するために、モンゴル マンダルゴビの遊牧民に、植物の利用に関する聞き取り調査を実施してきた。本発表では、調査地のモンゴル人のお土産や対話

を通じた関係構築について発表した。お土産は、高価であれば喜ばれるわけではなく、相手の好み、生活スタイル、および立場を考慮して選択しておく必要があること、そして頻繁に対話を重ねることが関係構築する上で重要であることを説明した。

●田中華子（名古屋大学博物館）

「親族の『一員』として親族を調査する」

TANAKA Hanako (Nagoya University Museum)

Researching on Kinship Being a Member of the Kin Group

本報告では、報告者の博士課程在籍時の調査地との関係をふりかえった。内容は以下の通りである。

1.調査地出身の男性との結婚・離婚の経緯。2.調査地の親族カテゴリーの概略、「嫁」の立場により調査地の親族語彙や親族関係の豊かさを認識したこと、興味深い経験の事例。3.調査者＝「嫁」の立場の難しさ、4. 反省点、歓待や支援への感謝の念。5.調査地の人との結婚に必要な心構え、困難や失敗もあったが、この調査が現在でも報告者にとって重要であることへの感謝。

●辛嶋博善（北海道大学）

「柿沼・田中両氏の発表に対するコメント」

KARASHIMA Hiroyoshi (Hokkaido University)

Comments on the presentations of Dr. Kakinuma and Dr. Tanaka



柿沼の報告は植物調査でありながら、現地の人々との関わりによって深められていること伝えるものであった。田中の報告は親族の「一員」として親族の調査を行う難しさとそれを経て到達した奥深さを伝えるものであった。それぞれの報告を理系・文系と区分することもできるが、むしろ本セッションにおいて共通性を見出すことが可能であった。それは、ともに現地の人々との深い関係から紡ぎだされてきたものであったということである。

Session II 教育 | Education

●島村一平（滋賀県立大学）

「同床異夢か、幸せな異文化誤解か？—滋賀県立大学とモンゴル国立大学の交換留学の7年」

SHIMAMURA Ippei (The University of Shiga Prefecture)

Complementary Misunderstanding, or Collaborative Education? : A Report on Student Exchange Programme between the University of Shiga Prefecture and National University of

Mongolia

文化人類学においていわゆる「調査する側」と「調査される側」という非対称的な関係が問題とされるようになって久しい。滋賀県立大学では、2008年よりモンゴル国立大学（社会科学部社会・文化人類学科）と交換留学を開始した。この交換留学によって、モンゴル人の日本研究者を育てることで



モンゴル人を「調査する側」とし、日本をモンゴル人によって「調査される側」とする関係性の反転が企図された。しかし、交換留学という「互惠関係」は、日本とモンゴルの関係における非対称性の改善に寄与できたのだろうか？本発表では、交換留学を行ってきた7年間を振り返ることで、こうしたポストコロ的な理念や価値観がモンゴル側によって共有されず、むしろ同床異夢的なプラグマティックな用具として交換留学を利用されていることを示した。

●尾崎孝宏

「フィールド調査中に会えるモンゴル人と日本の大学で会えるモンゴル人」

OZAKI Takahiro (Kagoshima University)

Mongolians Met during a Field Research and during a Class in Japanese University

発表者とモンゴルの関わりは、生活者としてはモンゴル国の方が圧倒的深い。大学教員としては内モンゴル、しかも東部出身者に限定される。教員としての発表者はモンゴルを知っているがゆえに、学生にとって彼らの自己認識とは異なるモンゴル像を押し付けるネガティブな存在ともなる。こうした問題の根底には、往々にしてデータより権威が基礎となる説得の在り方が存在するが、こうした説得の在り方を改変することが必要である。

●上村明（東京外国語大学）

「コメントーモンゴルとのかかわり、フィールドとのかかわり」

KAMIMURA Akira (Tokyo University of Foreign Studies)

Comments: Involvement in Mongolia and the field

教育においては場所が日本に移ることによって調査地の人間との関係が変化するが、時間的経過によっても関係が変化する。これをコメントーターの体験を例に述べた。つまり、長年おなじ調査にかよっていると調査者の年齢が相対的に高くなり、年長者の役割を期待されるようになる。また、日本人とモンゴル人との間には、交渉の作法（文化・価値観）のちがいとも呼べるものが存在し、衝突が生

じやすいことも指摘した。日本人は、モンゴル人に本心を隠すずるい人間だと思われやすい。

Session III 生活 | Livelihood

●バティン・ジミンゴア（モンゴル語教室ノタック）

「ブリヤートモンゴル人ライフヒストリー調査について」

Bat-arbin Jimingoa (Mongolian Language School Nutag)

Life History Research on Buryat Mongols

私は、2004年11月、また、2005年夏7月、8月にわたって、ブリヤート共和国ウランウデ、中国内モンゴル自治区フロンボイル盟、モンゴル国ウランバートルのブリヤートモンゴル人のライフヒストリーをインタビューした内容を発表した。



ウランウデでのインタビューは、ブリヤート共和国の文学雑誌「バイカル」の編集長を長年勤めたセルゲイ・ツレンドルジエフ（Сергей Сультимович Цырендоржиев）さんのお世話になって、ブリヤートの方々に連絡して頂き、20人ぐらいの生い立ちを質問して、記録した。皆さんが勉強不足な私にとっても親切に協力してくださったことを、心から感謝している。そして必ず皆さんの語ったことを本

にしたいと思う。

●滝口良（北海道大学）

「モンゴルのしきたりと『モンゴル化』すること」

TAKIGUCHI Ryo (Hokkaido University)

Mongolian Customs and Mongolization (“Mongolchloh”)

本発表ではモンゴルの生活を、伝統的・文化的な「しきたりの領域」と、「市場経済化のなかでモンゴルの人々が関与せざるを得ない実践や経験の領域」という二つの理念型からとらえた。事例としてモンゴルの人々のみならず調査者も直面する贈与ないし賄賂としての土産や金銭の贈答の場面をとりあげ、モンゴルでの物のやりとりにおける政治性とこれに反する情念の働きを明らかにした。

●風戸真理（北星学園大学短期大学部）

「No Mongol, No Life—相互埋め込みと抜き差しならない関係から得られる成果」

KAZATO Mari (Hokusei Gakuen University Junior College)

No Mongol, No Life: Results on Embeddedness and Commitments



モンゴル研究者はモンゴルの文化・社会・歴史を生活の糧としつつ、モンゴルからの呼びかけにて

きる限り応えて相互に依存している。日本とモンゴルの関係は、研究の対象にとどまらず、よりよい生活へのチャンネルであり、また一方での私生活に他方が埋め込まれ・内面化されるような関係である。このような抜き差しならない関係プロセスのうえにこそ、深い共感にもとづく他者理解としてのライフヒストリー研究や、真の意味での参与観察にもとづく人類学研究が可能になっているのである。

総合討論 | General Discussion 日本・モンゴル間の特徴

研究者と調査地の関係における日本とモンゴルの特徴を、「モノのやり取り」、「関係構築」、「対立と協働」という三つの切り口から検討した。

たとえば、モンゴル人がお土産を喜ぶかどうかは、物そのものが気に入られるかはもちろん重要だが、喜ぶ／喜ばないという行為自体が対人交渉の手段のひとつとなっており、同様に、特に外国人とのやり取りにおいては、しきたり（ヨス）が交渉を優位に進めるための手段として用いられることがあると指摘された。一方、調査者と被調査者という非対称な関係は日本とモンゴルのあいだに確かに存在しており、その解決策として現地研究者との Win-Win な共同研究の実施やモンゴル語による研究成果の発表が提案された。このほかにも、現地のしきたりや習慣における「不条理」から他者理解を深めること、戦前と戦後で親族研究の重要性が変わったことなどが議論された。



最後に、発表者、コメンテーター、参加者が一言ずつ感想を述べ、閉会した。

*当報告書は、各著者および編者の著作物です。

This report is copyrighted by each authors and editors.

東京外国語大学AA研 FSC主催

フィールドネット・ラウンジ企画・国際ワークショップ

「調査地との新たな関係を探る：現代モンゴル研究を事例として」

2014年3月3日 富田敬大・風戸真理（編）